鴻門の懷古

臨潼の滯在華清宮

四日渭南を發して西に向ひ、姚家庄（人家十餘戸）柿樹多し）廟塞（人家十餘戸）綿花麥多し）、揚庄（人家十餘戸）張庄（人家二十餘戸）等を經て冷口村に到る。此處は人家約二百、小學堂一、守備隊十名を置く、西行又約一里河あり幅約八米突、流水黃濁、一見淺深を別たざるも、優に徒渉し得べく、兩岸而も緩坡を成せり。其れより約數十町臺地を下りて其麓を進み、趙庄を過きて新豐に入る。新豐は人家約五十、土城を有し、往時、之を鴻門と稱へ、即ち樊噲が忠勇、項羽を壓して、高祖を虎口より脫せしめたるの地、今は是等史蹟を印象する何等の物なく、唯、臨潼山頂暮雲飛び、渭水悠々歸帆遠きを見るのみ。斯て西南に進むこと尙ほ約一里、黑家舖及占頭坊を過ぎて臨潼に投ず行程十里餘。

五日臨潼に滯在す。此地人家約一千、磚製の城壁之を繞り、南に臨潼山を負ふて三面皆平野を控ゆ。其の南門外に、溫泉あり、是れ即ち唐の華清宮の地。史を按ずるに、京兆の照應縣、驪山の麓に溫湯を出し、唐の時、湯を治めて池と爲し、山を環らして宮を列ふ、開元十年溫泉宮を置き、天寶六年華清宮と改め、更に臺殿を起して山谷に跨り、明皇歲每に此に幸すと。王維が太常韋主簿五郎溫泉の寓目に和するの詞を誦し來れば、如何に當時の壯觀なりしかを知るに足る。『秦川一半夕陽開』依然